

## 農業経営者ルポ

文・秋山基

# 「この人この経営」第57回

## イ(草)刈るか、生きるか

東孝雄さん (53歳)

〒869-4813

熊本県八代郡電北町若洲23

TEL 0965-52-6740



【プロフィール】1950年生まれ。農業高校を卒業後、家族とともに干拓地に入植。イグサとコメを中心とした経営を続け、後にキャベツ、パレイシヨとの複合経営に転換。現在の作付けはイグサ1.1ha、モチ米2.5ha、キャベツ1.3ha、パレイシヨ1.7ha、飼料作物1.1haで農協出荷が中心。労働力は妻と長男。

熊本県西部から八代海にせり出した

た広大な平野は、不知火干拓地と呼ばれている。総面積約530haが、

まるで定規で線を引いたように区分

けされ、長方形の圃場が海岸線近く

まで延々と続く。八代地方が、イグ

サの産地として名高いことは改めて

語るまでもないだろう。しかし近年

では中国産畳表の影響を受け、トマ

トやキャベツなどの複合経営に切

り換える農家が増えている。

東孝雄さんもそんな転換に踏み切

った1人だ。電北町で現在4haを経

営し、イグサ、モチ米に加え、キャ

ベツ、パレイシヨを栽培している。

「中国産の畳表に押されたのは口惜

しいばってん、良か品物を作っても

値段を自分で付けることができん以

上、仕方がなかですよ」

やや湿った潮風が吹き抜ける圃場

を前に東さんは言った。イグサの作

付けは全盛期の約半分。目の前の畑

にはキャベツが植えられている。け

れども、この地区で際立つほどの機

械化を図り、土作りにも力を入れた

経営に自信を失ってはいない。イグ

サを作り続けているのも、品質では

中国産に負けないという密かな自負

による。

入植者2世。4haの水田に

ひかれ、農業に夢を抱いた

東さんは父親の代に干拓地に移つ

た入植者2世だ。実家がかつて、町

内の集落で40aほどの農地を持ち、

やはりイグサとコメを栽培してい

た。それだけでは生計を立てられず、

海苔の養殖も手掛け、冬場は家族総

出で胸まで海につかった。広い田ん

ぼを持ちたいというのが一家の願

だった。

昭和40年代の初め、県が干拓地へ

の入植者を募集していると知った父

は「コメだけ作れば生活できる」と

いう謳い文句に誘われた。長男で、

農業高校に通っていた東さんが後継

者への意思を固めていたことが条件

に合い、入植はかなう。

「入ってみると、やっぱりコメだけ

じゃ生活できませんでしたけどね。

イグサも続けたし、小麦やタバコを

作った時期もあった」

そうは言っても土壌条件は良く、

暗渠が整っていたため、一応は排水

上の心配もなかった。何より魅力だ

ったのが4haという面積だ。農業人

生のスタートを切ろうという若い後継者に明るい未来を描かせるには十分な広さだった。

イグサは昭和60年代まで、ほぼ完全に国産で賄われていた。畳表の製造まで一貫して行われるのが一般的で、生産農家は収穫を済ませると、色と香り、光沢を保たせるための泥染めをし、乾燥させた後で織機にかける。

最盛期だった昭和の終わり頃、東さんはおよそ2haにイグサを作付けしていた。製造までこなせば10a当たり100万円は稼げた時代だ。倉庫の2階では織機5台をフル稼働させ、7月の収穫が終わるとほぼ1年中、時間さえあれば畳表を織っていた。

「あの頃は、自分で考えても値段が高かったですね」

作れば作っただけもうかり、入札業者との間で値段が折り合わなければ売らなくて済んだ。しかし、やがて消費者嗜好が変化し始め、フロアリングやじゅうたんが好まれるようになる。国産イグサの需要は軒げ落ちていく。そこに中国産の輸入増が追い打ちをかけた。熊本のイグサ

栽培農家は大打撃を受け、経営に行き詰まって自殺する人まで出た。

「イ(草)刈るか、生きるか」――。周囲ではこんな言葉までが語られたそう。生産者団体は中国産の輸入阻止を叫び、「百姓一揆」を模したようなデモも繰り広げられたが、ほとんど効果はなかった。

### 良い品物を作って喜ばれたい

暫定セーフガードの発動で畳表の



圃場整備が行き届いた畑。200mまっすぐにキャベツが並ぶ

価格はやや回復したと言われる。さらに熊本県では最近、高級品種「ひのみどり」の作付けを奨励している。細くて色合いが強く、見た目が美しいのが特徴で、一般品の2倍以上という高値で取引されている。いわば熊本イグサの復活を目指しての「切り札」だが、東さんは懐疑的だ。近隣の生産者が次々とひのみどりに換えていくのを眺めながら、なお在来品種を作り続けている。

昨春秋、ひのみどりが中国で無許可栽培されているという疑いが強まり、種苗法に基づく権利を持つ県は「海賊版」の輸入差し止めを税関に申立てた。だが、せっかく高級品種を開発しても、だれかが持ち出せば真似されるのだ。不毛なイタチごっこに巻き込まれるよりは、丈夫で長持ちする在来種をしっかりと作っていた方がいいというのが、東さんの考え方なのだろう。

「やっぱりね、熊本のイグサを守ってやるという気持ちはある。私は在来種でも

良い品物を作って、本当にお客さんに喜ばれたいんですよ」

東さんの自宅に上がらせてもらうと、天然土で染めた畳のさわやかで懐かしい香りに包まれる。さすがに生産者だけあって、畳は3年ほどで替えるのだと言う。「せめてイグサ農家の自分が使わないと」と、口ぶりはやや自嘲気味だが、やはりそこにはプロとしての誇りを感じる。そしてその誇りを裏付けるものが、東さんにはちゃんとある。

### 排水を良くすれば根の張りが違う

「機械は道楽です」。倉庫を埋め尽くす農機群の前に、東さんは照れくさそうに顔をほころばせる。子供の頃から手先が器用だと言われ、機はいじりの楽しさから農業に入った。聞けば、父親も同じだったという。小麦のすじまき機など、自分で作ってしまうような人で、そんな父の背中を見て育つうちに東さんも機械が好きになった。中古部品を集め、修理、改良はたいいてい自分でやっつてしまう。

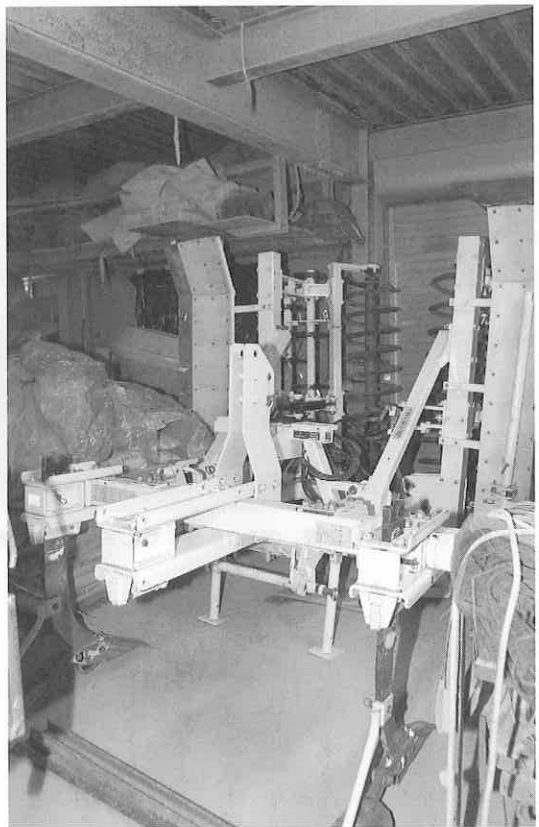
小麦を栽培していた頃、土を乾燥

させるためにプラウを試したのが約20年前のことだった。土の移動が大きすぎると感じ、その後、スタブルカルチに替えた。踏圧で、深さ60〜70cmの本暗渠への縦浸透が悪化し始めると、弾丸暗渠せん孔機を導入し、エアインジエクタもそろえた。

出費がかさむと、妻、久枝さんが心配する。だから、機械を買うのは「じわじわと」だ。借金をしたこともない。それでいて、周囲ではまったく使われていなかったサブソイラをいち早く買い入れて試すなど、常に集落内で先頭を切ってきた。

「コメにしてもイグサにしても、排水効果を上げれば、作の出来がぜんぜん違うですよ。サブソイラはうちが買ってから、周りの人もだいたい使うようになったな」

5年前には、「念願だった」クロトラクタを購入。装着するサブソイラなどと合わせて約800万円の投資だが、「これで天気は左右されずに作業ができるようになった」とうれしそうだ。さらに昨年、レーザーレベラーを中古で買った。イグサ、コメとバレイシヨとを輪作するために均平が大事と考えた上での



田畑輪換を繰り返す圃場でレーザーレベラーが威力を発揮している

決断だった。

機械集めを「道楽」と卑下するのは、控えめな性格からだろう。雨量が非常に多いこの地域では、いかに効率的に作業を進めるかが勝負を分ける。

「それに後々のことを考えれば、利益を上げること考えるよりは機械を買った方がいいと思う」

その「後々」については後でふれる。

### 農業は土作りに尽きる

現在、東さんは2枚の圃場を所有しており、1枚はモチ米の後にイグ

サ、飼料作物、それからキャベツ。もう1枚はモチ米の後がバレイシヨという輪作体系をとっている。堆肥は作ごとに10aあたり2〜3tを投入する。

「農業は最終的に土作りですから」

あつざりと口にするものの、年間160tという堆肥の量は周囲から珍しがられるという。この地域では農協も早くから「堆肥を入れるように」と指導してきたが、周りの農家は化成肥料ばかりを使う傾向があったからだ。

東さんも追肥に化成肥料を使うが、入植当初から堆肥重視の方針を変えたことがない。以前住んでいた

集落の酪農家と契約して飼料作物や稲ワラと良質な堆肥を交換してきた。相手は若い頃からの遊び仲間でもあり、「こだわり」などと片意地を張らなくても、ごく自然な形で関係を保ち続けられた。今年は堆肥場に屋根を付け、倉庫としても使えるように整備する。

5年ほど前、東さんは近くの仲間とグループを作り、カルビーポテト(株)との契約でバレイシヨの栽培を始めた。イグサの値段が下がってきていたし、カルビーからはポテトハーベスタが借りられるのが魅力だった。しかも、この地ではバレイシヨを収穫した後、6月から遅ければ7月の20日頃までなら田植えができる。カルビー側の勧めに約20戸の農家が乗った。

ところが慣れない共同作業には悩まされた。ハーベスタ2台を借りられたのはよかったが、いざ順番に使うとなると、自分の番が気になって仕方がない。収穫時期がちょうど梅雨前に当たると、作業の進行もどうしても遅れがちになる。

規格が厳しく、相場より安い契約価格に不満をもって離れていった農

家もあり、グループは今では数戸に減ってしまった。その中で東さんは「収入になる以上、続ける」と粘り強さを見せる。

「それに機械化で排水対策をしたおかげで、うちでは良い根が張って、バレイショがかなり取れる」

イネの後作にバレイショを挟むことで輪作体系を維持したいという狙いもある。

### キャベツの味にこだわる 3代目

こうした一途な姿勢は次の代にも受け継がれているようだ。長男の照也さん（28歳）は、農業高校を出て後継者になった。今はキャベツを担当している。

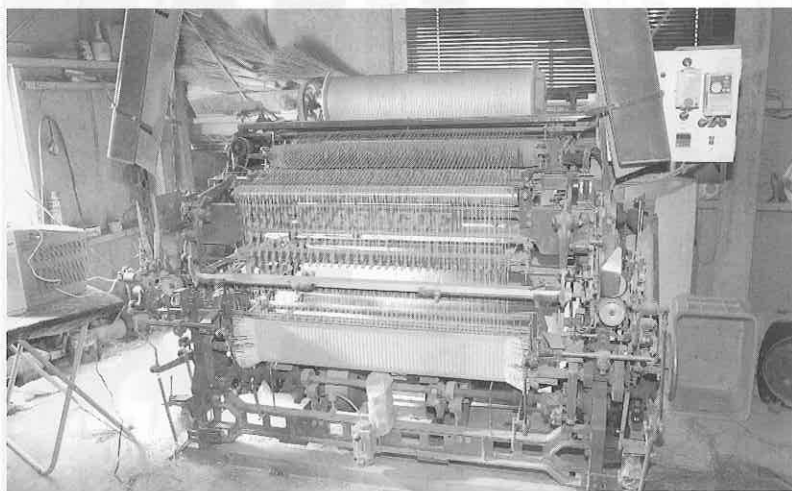
「農業はバクチみたいところが面白いです。頑張っただけお金が入ってくる。まあ、今年のキャベツは残念ながらはずれですけど」

就農時はイグサがまだ好況だったが、ちょうど周辺で野菜が作られるようになった頃でもあり、まずは福岡県の生産者の元で、1年間キャベツ作りを学んだ。その後の展開を考えれば、絶好のタイミングと言える

だろう。実家に帰ってから、キャベツを担当し、管理は父母に任せない。

「うちがこだわっているのは味です。やはり土が違うし、（速効性肥料の）尿素はやりませんから、甘みが違う」

キャベツの出荷先は農協と決まっている。しかし箱には生産者の判が押してあるため、味を評価してもらう機会がないわけではない。作る側にはそれが励みになる。



価格下落のあおりを受け、イグサの織機は近年あまり使っていないという

照也さんは「いずれ、仲間グループを作り、自分たちの力で野菜を売れる仕組みも」と考えている。今

すぐというわけにはいかないが、栽培方法や商品の味を追求できて、もつと消費者と近づくことのできる組織があれば、農協だけに頼らなくても農業を続けていけるのではないかとイメージは膨らむ。

一方、東さんにはまた違った夢がある。干拓地の完成当初、割り当て

られた圃場は4haであったが、経営的な行き詰まりなどから、面積を減らしたり、兼業化する農家が増えてきた。以前よりは土地を借りやすい状態になっており、規模拡大に踏み切るチャンスではないかと時期をうかがっている。「イグサはこのままの規模でいいんですけど、輪作をしながら、もう少し野菜を増やせないものかと思うんですよ」

特に照也さんが後を継ぐことが決まってからは、将来の経営を考えるようになった。「もう機械はひと通りそろえましたからね。準備は整った。

あと2haばかり面積が欲しいですね」

ただ、規模拡大については、照也さんは慎重だ。「世の中の先行きが見えないから」と語り、今すぐ面積を増やすことよりは、まず経営を安定させることを優先させたいのだ。

意見が合わないことに父親は少し残念そうだが、それでも「いつかは」と思いを馳せる。いずれにせよ、黙々と土作りに励む父とキャベツの味を模索する息子の歩みは、まだ始まったばかりだ。

本欄の取材を担当していると、際立った個性をもつ農業経営者に話さうかがう機会が多い。「農家」であることを意識した人や、地域から浮き上がることを承知で、あるいはそのプレッシャー自体を楽しみながら、独立自尊の精神に磨きをかけるようなたくましい経営者たちだ。

東さん父子にはそんな派手さはない。が、世間の風潮に流されずに、ひとつのことにためめ努力を注ぎ込む、真摯で懐の深い強さがある。